

---

# 機動戦士ガンダム〇〇 魔神Z

五月雨 東

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダムOO 魔神Z

### 【Nコード】

N9592S

### 【作者名】

五月雨 東

### 【あらすじ】

西暦2307年、日本の町でミッル・兜は祖父と弟と平穏に暮らしていた。

しかしそこへテロリストが町を襲撃してしまう、ミッルは家の地下に避難するとそこにはMSとは程遠い形状のロボットがあった。その名はマジンガーZ。

彼は神にも悪魔にもなれるその力をふるい、世界を奔走する。

## 人物とロボット設定（前書き）

登場人物設定です。

## 人物とロボット設定

### 人物設定

ミツル・兜<sup>かぶと</sup>

16歳。この物語の主人公、よく町中や士官学校で喧嘩をしていたが音は優しい人間。努力家でもある。

弟のレンと祖父の長十郎と平穏な日々を送っていたがひょんなことから祖父は失踪、祖父の遺したマジンガーZに乗り、世界を混乱させるテロリストと戦う。

かおり・弓

ヒロイン。士官学校の優等生で日々喧嘩ばかりしているミツルによく注意する。

父はCBの協力者である。

レン・兜

ミツルの弟、喧嘩ばかりしているがかなりの努力家である兄を尊敬している。

長十郎・兜

ミツルとレンの祖父、形相は凶悪だが孫を愛するおじいちゃん、ミツルにマジンガーZを託したあと消息を絶つ。

### ロボット設定

ホバーパイルダ

マジンガーZを操縦する小型のホバークラフト。

## マジンガーZ

長十郎・兜が造り上げたスーパーロボット。全体24m、重量32t。機体の性能はガンダムの十数倍である。光子力エンジンで動いている。装甲は超合金Zという合金であり、ガンダニウム合金の数倍の耐性であり、鉄壁の防御力を誇る。自我が宿っているように、ミツルがピンチの時に自動でやってくることもある、パイルダも同様。自己再生、自己修復を補っており、数時間が立てば完全回復も可能。

## 武器

### ロケットパンチ

マジンガーZの代名詞ともいえる武器、マッハ9の速度で飛行し、ガンダムをも簡単に貫く。指からのジェット噴射で再度戻る。

### ブレストファイヤー

胸の放熱板から十五万度の熱線で相手の機体を溶解する。

### ルストハリケーン

口のスリットから強酸の混じった強風を出し、相手を錆び朽ちつかせる。超合金Zをも錆びつかせる。ガンダム相手でも機体の全体7割の装甲減少は免れない。

### 光子力ビーム

マジンガーZの両目から放つ破壊光線。ブレストファイヤーを凌駕する火力を持っている。

### マジンパワー

マジンガーZのパワーを通常の5倍にさせるマジンガーZの切り札。ただし今のところミツルしか使用できないらしい。

ジェットスクランダー

マジンガーZが飛行戦闘を行うように開発された兵器、マジンガーZと合体し、マッハ9のスピードで大空を飛ぶ。この兵器も超合金Z製。

## 人物とロボット設定（後書き）

マジンガーZが好きでガンダム00の世界へと出してしまいました。原作よりはるかに強化されているマジンガーZ、なぜならかなり強化しないと生き残れないからです。主人公をあまり人殺しさせないように努力しておきます。当然そのためにオリジナル話をさせていく予定です。第一話は5月6日からです。

## 第一話 その名はマジンガーZ（前書き）

機動戦士ガンダムOO 魔神Z 始まります



## 第一話 その名はマジンガーZ

日本

朝である。

ここの日本の町にはなんの変哲もない朝。しかし世界には戦争や紛争が勃発しているのである。ここはまさに世界の中でも数少ない平和な町である。

その町に建てられている一軒の家、そこには3人の民間人が住んでおりました。その家族たちが後の世界を大きく動かす人間たちとも知らずに。

長十郎「おはよう！」

部屋のドアから左目が失明しており傷跡がある老人が急に顔を出してきた。

レン「うわあ!!」

その家族たるこの家の少年レンは驚いた。

長十郎「ん?どうしたレン？」

レン「もう!いきなり顔を出さないでよ!おじいちゃんの顔、おつかねえんだから!」

長十郎「すまん、すまん、レン。確かに朝一番に見る顔じゃないわな!」

レン「いやあ、つい本当の事言っちゃって・・・すまねえ。」

するとレンの兄であろう青年が声をかける。

ミツル「こらっ！酷い言い方するんじゃない！レン！誰のおかげで朝飯が食えると思ってるんだ！」

レン「ゴメン！ゴメン！兄貴の前じゃおじいちゃんの顔の事は御法度だったぜ」

長十郎「はっはっはっ！よいよい。それに朝飯が食えるのはミツルが作ってくれる料理のおかげじゃしな！」

ミツル「まあ、それほどでもないかな？」

長十郎「だからってお嫁にはいけないで。」

レン「おじいちゃんそれ逆。」

はははははは！！

レン「うちは平和だね。ソレスタルなんたらってのが宣戦布告したつてのが嘘みたいだよ。」

ミツル「確かに、普通じゃあない。アレは冗談かもしれない。それこそ神か悪魔じゃなきゃ無理な話さ。」

長十郎「神か悪魔か・・・」

ミツル「さあ、早く朝飯をくっちゃまおうぜ、学校に送れちまう。」

レン「そうだ！昨日の光子力の実験のニュースを見なきゃ！」

レンはテレビをつける。

ニュースキャスター「ごらんください成功です！実験は見事に成功しました！」

長十郎「・・・・」

ニュースキャスター「これが次世代のエネルギー、光子力実用化に向けての第一歩であります。」

長十郎「莫迦めが。」

ミツル「何か言ったか、おじいちゃん？」

長十郎「いや、何でもない、朝飯ごちそうさん。そうだ、ミツル、レン今日は早く帰ってきてくれんか？少し話があるんでな。」

ミツル「話？」

長十郎「頼むぞ。」

長十郎は部屋に出た。

ミツル「おじいちゃん？」

レン「どうせ新しいバイクでも買ってエンジンでも改造するって話じゃないの？」

ミツル「それにしちゃなんか深刻な雰囲気だった。」

レン「気のせいだよきっと。それが研究がちょっと行き詰ったんじゃないの？」

ミツル「かもな、おじいちゃんらしいな。」

レン「さすが元有名科学者だね。」

ミツル「おかげでうちには発売の特権でいくらかお金をもらっている。」

レン「でもほとんど新しい研究費に消えちゃうなんてもったいないよ。」

ミツル「ああ。・・・また何かやってるらしいけど、研究室に入れてもらえない。研究所で志望した親父たちのようになってな。」

レン「でも俺たち気にしてないのにね。」

ミツル「ああ。それにおじいちゃんにとっちゃお金は遊びや贅沢のためにあるんじゃないやねえ。なにかすげえ新発明をするためにあるんだ。すばらしくかつこいいおじいちゃんだぜ！俺は大好きさ！」

レン「ああ！俺も！」

ミツル「さあ、学校へ行くか！今日は寄り道なしで帰るぜ。」

とある高原

「CB」には所属していないテロリストたちはある町を目指していた。MSはおよそ15機

テロリスト1「われわれはこれより光子力の襲撃に入る。あの力を使えばガンダムと互角に渡り合えることができる。」

テロリスト2「研究所の周辺の町はどうします？」

テロリスト1「もちろん襲撃する。もともとこの任務は町を破壊する作戦でもあるからな。」

テロリストたち「了解。」

士官学校のグラウンド

???「よお兜、どうだい調子は？」

ミツルの悪友のボスはミツルに話しかけた。

ミツル「そこそこ。そっちはどうだ？」

ボス「ククク・・・。」

ボスは今でも何かを企まんという顔で笑っていた。

ボス「兜、俺は一世一代の告白に出る！」

ミッル「一世一代の告白う？」

ボス「そう。隣のクラスのマドンナかおりちゃんに告白するのよ！」  
はん

かおりちゃんとは言ったとおり隣のクラスのマドンナだ  
美人であり成績優秀。誰もが憧れをもっている少女である。

ミッル（なるほど、確かにこのボスも見とれるのも無理も無い。）  
「じゃあ頑張rinaよ。」

ボス「ああっ！てめえ今絶対に失敗するって思ってただろう！！？」

ミッル「いやいやいや！思ってたねえって！」

ボス「ようし！表に出やがれ！その根性たたきなおしてくれる！」

ミッル「いいぜ！ちょうど体がなまってたところだ！」

ボカ！バキ！

士官学校から激しい殴り合いが続いていた。

そして下校時刻

ミッル「さあーて帰るか。」

顔が痣だらけのミッルは愛機のバイクで家に一直線に走る。

兜家

ミツルとレンは家の玄関に入っていく。

ミツル「ただいま。あれ？おじいちゃんいないの？」

レン「いや昼寝しているだけなんじゃないの？」

ミツル達は祖父長十郎の名前を家で呼び続けていた。しかし長十郎の姿はどこにもいなかった。  
しかし……

レン「あ……兄貴！！この階段……」

レンはリビングで地下室につながる階段らしきものを見つけた。

ミツル「きっとこの階段の先におじいちゃんがいるのか……」

レン「兎に角行ってみよう。」

ミツルとレンは地下室につながる階段を下りていく。

## 兜家地下室

ミツルとレンは地下室のドアを開けた。するとそこには、全長20mの更迭の巨人が立っていた。

レン「なんだこれ？悪魔……？」

ミツル（いや違う……これは神だ！俺にはわかるんだ。そういえばおじいちゃんの部屋にはギリシャ神話の本がよく飾られていた。子供のころの俺はその本が好きでよく読んでいた。そして目の前に

いるこの巨人はあの本に出ていた金色の神に似ているんだ。」

その時である。ズズン！！と轟音がした。

町

テロリストたちは光子力研究所に向かって町を破壊していた。にげまどう住民、破壊を楽しむテロリスト、崩壊するビル……今までの平和が嘘のようだった。

テロリスト1「このまま直行。目標光子力研究所……。」

テロリスト2「リーダー、向こうの家の中から何かが出ます！」

テロリスト1「何？回線をつなげ！」

テロリストのリーダーはモニターの回線をつないだ。

モニターの中には空にそびえる鉄の城が堂々と突っ立っていた。

4分前

ミッル「えーとこのホバーパイルダ であのロボットと合体すればいいわけだな。」

レン「本当にうまくいくのかなあ。」

ミッルとレンはホバーパイルダ に乗っていた。レンはパイルダの後に座ってミッルがパイルダ を動かしている。



ミツル「でもどうやってやるん？」

パイルダーオン。

突如パイルダのモニターに画面が流れた。  
それは文字だらけだった。

マジンガーZとトツキングの仕方。

ただパイルダ オン！とさけばいい。

ミツル「至極単純だな。よしパイルダアアアアア オオオオオオ  
ン！！」

ホバーパイルダの翼は折り、鋼鉄の巨人の頭部に見事トツキング  
した。

神にも悪魔にもなれる力

その名も……

その名も……

その名も……

マジンガーアアアアアアアZエエエエエエエ

エトー！

そして今に至る。

テロリスト1「なんだあのMSは見たことがない！新型か！？」

テロリストたちは驚愕していた。突如家の中から見たこともない口ボットが現れたのだから。

レン「ま・・・町が・・・」

ミツル「ひでえ・・・」

町はボロボロだった。今まで空気がきれいで住みやすく、居心地のいい街が一瞬で破壊されてしまった。

ミツル「おい！てめえら！そこまでしてこうする理由なんてあるのかよー！！」

ミツルは憤慨しながら言う。

テロリスト1「黙れ！！光子力を奪取するためには我々テロリストたちの悲願達成だ！！謎のエネルギー光子力、それを利用すれば我々は神に近い存在になる。」

ミツル「神に近い存在だと・・・じゃあテメエら、神に近い存在になる前にこのマシンガンZを倒してきやがれ！！」

テロリスト1「面白い、望み通りにしてやる、撃てい！！！！」

15機のMS達はマシンガンやビームライフルでマシンガンZに集中砲火を浴びせる。爆風の音がする。たとえGNフィールドがないガンダムでもひとたまりもないだろう。テロリスト達はさすがに落

ちたと思っただろう。しかし……

ミッル「すげえ、外傷はひとつもない。」

マジンガーZは無傷だった。あれほどの集中砲火を浴びても傷一つないMSなんて数少ない。

テロリスト1「そんなバカな!!どうして……何故!？」

テロリスト2「リーダー!!もう全機弾切れです!」

絶対絶命。

さっきまでは町を破壊し尽くしたテロリスト達がロボット1体も傷をつけれない。そしてあの鉄の城の戦闘能力はガンダムをこえるだろう。テロリスト達は体の震えが止まらなかった。

あらゆる攻撃から身を守る鋼鉄の壁。

10000の敵に囲まれようと傷一つない鉄壁の合金。

その名も超合金Z。

ミッル「いくぜ!テロリスト共!」

レン「兄貴、操縦の仕方わかってるのか!？」

ミッル「ああ。感覚でわかる。行くぜ!」

マジンガーZは攻撃態勢に入る。

全てを貫く正義の拳。

その名も！

その名も！

その名も！

ミツル「ロケットオオオオオオパアアアアンチ！！」

マジンガーZから鋼鉄の拳がジェットのように放たれる。

その拳をくらったテロリストのリーダーのMSは見事實かれ・・・  
撃墜された。

テロリスト2「リーダーが一瞬で・・・」

テロリスト3「悪魔だ・・・悪魔のロボットだ！！」

ミツル「さあ！まだやるのかテムエら！」

テロリスト2「て・・・撤退！！」

ドオオオン！！

テロリスト達が撤退しようとした時だった。どこからか砲撃がした。

???「狙い撃ったぜ。テロリスト共。」

マジンガーZの後方に緑のガンダムらしき機体がみえる。

ミツルは気がつくともジンガーZの前にガンダム3機が舞い降りていた。

ティエリア「こちらCBだ。ソレスタルビーイングマジンガーZ、およびその操縦者、君たちに話がある。」

続く

**第一話 その名はマジンガールZ（後書き）**

次回「CB」

## 第二話 C B

ミッルがマジンガーZで敵と戦ってから2時間後  
バードス島

バードス島のある部屋ではいかにもセレブがいそうな豪華な部屋で  
ソファアーに座りながらマジンガーZの映像を見ていた女性がいた。

その女性の年齢は30代後半だった。しかし誰しもが「本当に30  
代なのか？」と聞かれる美貌の持ち主だった。

「失礼しますDrアテナ。」

部屋のドアからノックの音が聞こえ、女性は静かにDrアテナと呼  
ばれる女性に声をかけた。

Drアテナ「手続きはすませておいたのエレガ大佐？」

エレガ「はい。戦力不足のテロリスト達や「ユニオン」、「AEU」  
の上層部にタロス像と「機械獣」を送りつけました。その利益は我  
々の給料の百倍近くに及ぶでしょう。」

Drアテナ「御苦労さま。そういえば貴方マジンガーZについて知  
ってる？」

エレガ「突如現れた謎のMSですか？」

Drアテナ「知ってるならば話は早いわ。あとマジンガーZの戦闘  
能力に思ったことはない？」

エレガ「MSの集中砲火を浴びても傷一つないボディと拳をマッハ9で飛ばす鉄拳。恐らく「CB」のガンダムに匹敵する戦闘能力かと……」

Drアテナ「ガンダム？あんなのマジンガーZにとっては雑兵程度にしかないわ。」

エレガ「それほどの戦闘能力のですか……」

Drアテナ「おそらくこの時代「CB」のガンダムとマジンガーZが動かすかもしれないわ。そして……あの子も……」

## 光子力研究所

ミツルとレンは謎のガンダム集団「CB」に連れられ、CBの協力者であり光子力研究所最高責任者である弓教授と面会することになった。

弓「君がミツル君とレン君かね？」

ミツル「はい、俺達は長十郎兜の孫であるミツル・兜です。」

レン「お……同じくレンです!!」

弓「はっはっは。そう固くならなくてもいいよレン君。確かに私は名を上げ過ぎてしまったからね。」



ミツル「あの・・・光子力研究所っていいですけど、まさかマジンガーZのエネルギーって・・・」

弓「そう。君の言う通りはマジンガーZ光子力エネルギーを動力源としている。」

ミツル「でもなんでそのエネルギーをおじいちゃんが・・・」

弓「恐らく兜博士は我々のはるか先まで光子力を開発したのかもしれない。そしてこの地球前例のない『スーパーロボット』を作り上げた。」

ミツル「それが・・・マジンガーZ・・・」

弓「マジンガーZには超合金Zの他にもまだ未知の力が隠されている。我々はマジンガーZの解析に移るつもりだ。」

ミツル「あの・・・おじいちゃんとは知り合いだったんですか!？」

弓「うむ。あの人は私の師匠だ。兜博士は数十年前までは軍用兵器の開発をしていた。私はその助手だった。」

レン「MSとかを作っていたのかな。」

弓「その通り、しかし兜博士は「これ以上かたっ苦しい軍にはいられない」と言い出し兵器の開発から足を洗ってしまったのだよ。そして隠居して家族と暮らしていたとは・・・」

レン「そんなに凄かったなんて・・・」

弓「所で兜博士は今元気かね？」

ミッル「自分にも分らないんです。昨日おじいちゃんは「早く帰ってこい」と俺たちに言いだして、いざ家に着いたらおじいちゃんは不在のままで、それで扉が開いたままの地下室をでたらマジンガーZを見つけて、町を襲撃したテロリストたちをマジンガーZで倒したんです。」

弓「やはり家の地下で造っていたのか。テロリストといえどMSを一撃でなぎ倒す戦闘能力。このことは世界中にばれているかもしれない。」

ミッル「じゃあもしかして・・・」

弓「マジンガーZを狙う連中は世界中で現れるだろう。「ユニオン」「AEU」などが妥当だろう。」

ミッル「マジンガーは・・・俺が守ります！！」

弓「分かった。だが今君はマジンガーZの操縦が完全にできてはいない。ミッル君、レン君。マジンガーZの操縦が慣れるまでここで住宅してもらう。」

ミッル「わかりました弓教授。」

光子力研究所 格納庫

ミッル達が弓教授と会話している同じ時間に「CB」のガンダムマイスターである刹那・F・セイエイ、ロックオン・ストライス、ティエリア・アーデ、アレルヤ・ハプティズムは格納庫からマジンガ

「Zを見続けている。」

刹那「これがマジンガーZ、神にも悪魔にもなれる力。」

ロックオン「全長はガンダムとほぼ変わらない。だが違うのはガンダムをも凌駕する圧倒的な火力と装甲。」

ティエリア「マジンガーZが起動したときウェーダにそれなりの影響を及ぼしている。」

アレルヤ「すごい機体だね。マジンガーZ。」

ティエリア「ミス・スメラギからの命令により光子力研究所の調査を頼まれた。弓教授とはイオリア氏とは学生時代先後輩の仲である。よって光子力研究所には被害を加えない。だがもし光子力が軍事兵器の作成の動揺を見せた場合破壊する。」

ガンダムマイスターがマジンガーZを賛美している時だった。

ハロ「敵機接近、敵機接近!!」

ロックオン「何!? テロリスト達は俺たちが追い払ったはずだぞ!!」

アレルヤ「違う、これは・・・「AEU」だ!」

「AEU」のMS50機が光子力研究所を包囲している。

ティエリア「AEUが攻めてくるのもウェーダでも予想範囲内だ。」

弓「CBの諸君!」

弓教授が格納庫に駆け付けた。

弓「君たちはいったん逃げるんだ。光子力研究所は一応武装してある。」

アレルヤ「でもいくら何でもあの数では・・・」

ロックオン「それに俺達も任務なんです。光子力研究所は俺たちが守ります。」

弓「・・・わかった。ただし無理はするな。」

刹那「了解、刹那・F・セイエイ。目標を駆逐する。」

光子力研究所 所長室

レン「あ・・・あの数のMSがこの研究所を包囲している。」

ミッル「レン、悪いがお前はここに残ってくれ。」

レン「兄貴はどうするの。」

ミッル「マジンガーZであのMS達を追い払う。」

光子力研究所外

AEU大尉「さて、来るなら来いCB、我々「AEU」の切り札を

見せてやる。」

地下には寧猛な機械の獣が待機していた。

続く

## 第二話 C B（後書き）

次回「機械獣」

### 第三話 機械獣

昨日

日本

A E Uの基地にて

A E U大尉「機械獣？」

エレガ「その通り、A E Uの協力者であるD r、アテナはこれ以上仲間が戦争の犠牲になるのは嘆かわしいとおっしゃられた・・・そこでD rアテナは古代ミケーネの遺産であるタロス神像と機械獣の改良と量産に成功したのだ。」

基地の格納庫には頭部に巨大な鎌を構えた、骸骨の顔を象った頭部をもつ機械獣、ガラダK7。

戦艦に匹敵する高出力のレーザーを放てる二つの首の機械獣、ダブラスM2。

上下に分離させた巨大な体の間に、強力な電磁網を放つ機械獣、ノナカーゴH2。

古代ミケーネの発掘などに大いに貢献したタロス神像。どれもM Sを圧倒するパワーと耐久力を持っていた。

A E U大尉「しかし、無人機にどうやって指示しろというのですか？」

エレガ「その点なら心配ない。貴様にこれを渡そう。」

エレガはA E U大尉に黒い杖を渡した。

A E U大尉「これは杖？」

エレガ「そう。この杖は機械獣やタロス神像を操る事ができる。自分の意のままに。」

A E U大尉「自分の意のままに……」

エレガ「これならばガンダムと戦う時最低でも互角にわたれるだろう。」

A E U大尉「しかし神出鬼没のガンダムが何処に現れるか……」

エレガ「光子力研究所。」

A E U大尉「光子力研究所!？」

エレガ「貴様は知らんだろうが光子力研究所とC Bは協力関係にある。あそこは潰す価値はある研究所だ。」

A E U大尉「しかし、今光子力研究所は世界でも注目されている研究所、実験の最中でありますしそこを攻撃してしまつては……」

エレガ「問題はない。その時はD rアテナがなんとかしてくださる。あのお方はA E Uやユニオンでもかなり顔がお広いお方だ。そしてA E Uの上層部の命令でもある。光子力研究所を潰すことはな。」

A E U大尉「了解しました。命令とあらば我々は従うのみです。」

エレガ「おや、もう行くのか？」



A E U大尉「光子力研究所とC B、この二つの連携を許したら世界の脅威となりかねますので……」

エレガ「わかった。私もすぐここを離れるでしょう。」

A E U大尉「もう行ってしまうのでエレガ大佐。」

エレガ「まだ商談が残っている、では失礼する。」

エレガ大佐はそう言って基地を出て、飛行要塞グールに搭乗し空を飛ぶ。

エレガ「この攻撃はC Bの強さと機械獣の性能のテストでもある、いい結果を出せよA E U。」

そして今に至る

刹那「エクシア、目標を駆逐する。」

刹那のガンダム、エクシアは得意の白兵戦で次々と敵のM Sを撃破する。

ロックオン「狙い撃つぜ。」

ロックオンのガンダム、デュナメスは得意の遠距離からのスナイパーライフルで、次々とM Sを撃破する。

アレルヤ「ガンダムキュリオス、行くぞ！」

ティエリア「GNバズーカ、セット。」

ティエリアのガンダム、ヴァーチェとアレルヤのガンダム、キュリオスも地味ながらMSを撃墜していく。もはやAEUの部隊の全滅も時間の問題だろう。

その頃、行動隊長のAEU大尉は遠くの山の頂上にいた。

AEU大尉「さすがガンダムといったところか。だがその優勢はいつまで保てるかな？」

AEUの大尉はエレガ大佐に渡された杖を掲げ、

AEU大尉「ゆけい！機械獣軍団よ！敵をせん滅せよ！」

杖から巨大な電光が放たれ、地面に衝突する。

そしてゴゴゴ……と地震が起きた。

ロックオン「何だこの地震は！？」

アレルヤ「地面から何かくる！！」

地面からドパン！！と体を出したのは、100体のタロス神像と3体の機械獣だった。

刹那「100機以上も数があるだー！？」

ロックオン「ちっ！！数が多すぎる！！」

AEU大尉「さあ行け機械獣軍団！進撃開始だ！」

タロス神像と機械獣達はガンダムに向かって進撃を開始する。

ティエリア「まずい・・・光子力研究所に撤退する！！」

アレルヤ「了解。」

刹那「・・・」

しかし刹那はティエリアの命令を無視し、機械獣軍団に突撃した。

ティエリア「刹那・F・セイエイ・・・」

ロックオン「馬鹿野郎！死ぬ気か！？」

ロックオンも刹那を止めようと刹那の所へと向かう。

A E U大尉「攻撃せよ、ダブラスM2！！」

ダブラスM2「グオオオオオオオ！！！」

ダブラスM2はA E U大尉の命令を聞き、刹那のガンダムに向かって、戦艦に匹敵する高出力レーザー砲を発射した。

刹那「GNフィールド！」

刹那のエクシアはGNフィールドを展開したが、そのビーム砲に耐えられず、エクシアの装甲に多大なダメージを負う。

ロックオン「刹那！」

刹那「問題ない。戦闘を続行する。」

ロックオンはデュメナスでダブラスM2を狙い撃とうとしたが、タロス神像にデュナメスの体を抑えられてしまった。

ロックオン「くそっ！！動きを封じられた！？」

ガラダK7は二本の頭の鎌を取り出し、デュナメスの装甲を切り刻んでいく。

アレルヤ「くそ、援護すr・・・」

アレルヤのキュリオスはノナカーゴH2の伸縮する電気網にかかってしまい、電流で身動きがとれなくなってしまった。」

ティエリア「くそっ、これでは援護できない。」

ティエリアのヴァーチェも数10のタロス神像に囲まれてキリがない状態。」

4機のガンダムといえど機械獣軍団には歯が立たなかった。

刹那「GNソード！」

エクシアはダブラスM2にGNソードできりかかる。しかし、ちょっと腹を切られた程度のダメージしかダブラスM2に与えられなかった。

ダブラスM2はエクシアにビーム砲を発射する。  
エクシアはGNフィールドでガードしたものの、貫通し、それをモ

口にくらってしまった。

刹那「俺は・・・ガンダムに・・・」

A E U 大尉「さあダブルスM2よ、ガンダムに止めを・・・」

A E U 大尉が「させ!!」と言おうとした時だった。

「ロケットオオオオオパアアンチ!!!」

突如マツハ9の黒い拳がダブルスM2の胸に貫通する。そしてダブルスM2は爆発して果てた。

A E U「な…何が・・・」

A E U 大尉が遠くを望遠鏡で見ると、そこには無敵の魔神、マジンガーZの姿があった。

ミッル「なんとか間に合ったみたいだな・・・」

刹那「ミッル・兜・・・」

ミッルはマジンガーZに搭乗していた。初めてあったばかりなのに、協力関係である「CB」のガンダムマイズター達を見過ごすわけにはいかなかった。

A E U 大尉「何だ、あのMSは!?」「CB」の新兵器か!?

AEU一等兵「大尉、あれは4時間前テロリストたちをおびえさせた「マジンガーZ」と言う機体です!!」

AEU「ちいつ!だがたかが一機に何ができる!タロス神像達よ、あの黒い機体を抑えつけろ!!」

タロス神像100体近くはマジンガーZに向かって突撃する。

ミツル「いいぜ、てめえらにマジンガーの強さを見せてやるよ、うおおおりのややややああ!!」

マジンガーZはロケットパンチを使わず、格闘でタロス神像を粉々している。殴って、蹴って、そのパワーは世界中のMSのパワーを持ってもいやしないほどだった。

ティエリア「なんという……」

ロックオン「すげえ……」

AEU大尉「ならば機械獣ノナカーゴH2よ、あの機体を締めあげろ。」

ノナカーゴH2はキュリオスの攻撃をやめ、両手の電気網でマジンガーZを締め上げた。マジンガーZに電流が走る。

ミツル「そんなもの……きくかああああああ!!」  
だが全く平気だった。ガンダムをも戦闘不能にしてしまう電流を流してもマジンガーZには全くの無害であった。



A E U大尉は戦闘機に乗りすぐさま撤退しようとする。

ロックオン「おっと、最後はいいところりで狙い撃つぜ。」

デュナメスのビームランチャーでA E U大尉の戦闘機は大破する。

ティエリア（マジンガーZ、何故これ程の戦闘力を有しながらウェーダはマジンガーZの相続を許したのか・・・あの機体にかんりの秘密があるのだろうか・・・）

しかしこの戦闘がマジンガーZの名声を上げることになるうとは、パイロットのミツルも知る由もなかった。



## 第三話 機械獣（後書き）

次回「Zの評価」

## 第四話 Zの評価

A E U本部

A E U上層部達はエレガ大佐の偽情報による光子力研究所襲撃の映像を眺めていた。

ガンダムを圧倒する機械獣達、そしてマジンガーZに圧倒される機械獣達、これからの戦況において見誤る所は多いと考えた。

上層部A「マジンガーZ、あの機体の火力はけた違いですな。」

上層部B「今のところマジンガーZのわかっている武装はマッハ9のジェット噴射のパンチ、『ロケットパンチ』、一五〇〇〇度の熱光線を発射する『プレストファイヤー』、強酸の入った強風を出す『ルストハリケーン』、どれも凶悪な兵器ばかりです。」

上層部C「しかしマジンガーZは今のところ空中戦はまだ未知数の戦闘力、空中戦のMSを大量にマジンガーZに攻撃させれば落ちるのでは？」

上層部A「確かに、空中のMSを使えば、マジンガーZを倒すことはできましような。しかし『CB』と協力関係であるにも関わらず、未知のエネルギーである光子力を研究している光子力研究所を潰すにはなかなかもつたいない、ここはまだマジンガーZの攻略については干渉するべきではないのでは？」

ざわざわ……とA E U本部の会議室から雑音が流れる。

上層部A「では結論を言います。我々は半年まで光子力研究所には干渉しない、そして密かにマジンガーZの攻略を建てる。意義はありますか？」

上層部達「まあ、いいでしょうな……（警戒すべきなのはCBなんだし）」

こうして光子力研究所は救われた。いやAEUの上層部軽っ！というか適当だ……「CB」が変革する気持ちも分かるかもしれない。

日本

士官学校

ボス「聞いたか兜！？謎の機体の噂！？」

ミッル「ああ聞いたよ、凄い強さだったな。」

ボス「だろぉ？やつぱりビームサーベルやビームライフルみたいなしよばい道具や弱っちい装甲よりもパワーあふれる攻撃に、どんな攻撃もきかない装甲のほうがいカスんだよ！！」

ボス……君は全てのMS乗りを敵にしまった。

別世界で

A・R「成程・・・君はそういう偏見だったのか・・・」

K・B「そんな偏見修正してやる!!」

Z・A「あんたの偏見なんて知ったことか!!」

U・E「おかしいですよ、ボスさん!!」

ボス「す・・・すすすんません歴代ガンダムパイロットの偉人達  
!!」

そして今の世界に戻る。

ミツル「それよりも今日光子力研究所に行こうと思うんだ。ボスも  
行くかい？」

ボス「おう!あの黒い機体には興味があるからな、行かねえほうが  
おかしいってもん「行かないほうがいいわよ」だ・・・誰でい!？」

ボスとミツルは顔を後方に向かせた。そこには士官学校の女子生徒  
がいた。ボスの会話に勝手に入り込んだ女性は「かおり・弓」とい  
う名前だった。

かおり「ボスと言ったわねそこのデブの人。」

ボス「えちよ、かおりちゃん、デブとかちょっと酷いんじゃないか  
？」

かおり「うるさいわ。貴方にはデブがお似合いよ。」

ボス「そ、そんな・・・かおりちゃんが俺様のことをそんなに思っ  
てたなんて・・・」

かおり「いいえ、貴方の事なんて全く思わなかったわよ。」

ボス「ですよねー。」

ミツル「おい！お前ボスに少し言いすぎなんじゃないのか！？」

かおり「あら、貴方は・・・ちょうどいいわ、貴方ちよつと付き合  
いなさい。」

ミツル「はあ？」

ボス「か・・・兜オ！まさかお前・・・」

ミツル「いや初対面だし、深い関係なつた覚えはねえよ・・・」

かおり「そういう事、じゃあ行きましょ。」

ミツルとかおりは教室を後にした。

士官学校裏口

かおり「ここなら誰もいないわね。」

ミツル「なあ、アンタいったい何をするつもりなんだ？」

かおり「・・・単刀直入に言うわ。貴方マジンガーZを降りなさい。」

ミツル「な、アンタマジンガーZの事しってるのか！？」

かおり「当り前よ、私は弓教授の娘よ。知らないはずがないじゃない。」

ミツル「だがマジンガーZは降りねえ、あいつはおじいちゃんが造った無敵の鉄の城だからだ！」

かおり「そう・・・いまさら後悔しても遅いわよ。確かにマジンガーZは最強、だけど弱点は多々ある。貴方にそれがわかるかしらね。」

ミツル「なんだ・・・この女、マジンガーZを数年前から知っているようだ。一体何者・・・？」

ヴーヴーッ！！テロリスト襲撃、テロリスト襲撃、生徒たちは避難してください。

ミツル「な・・・」

かおり「テロリストの襲撃ですって！？」

日本 東京

沙慈・クロスロードとルイス・アレヴィはマジンガーZのニュースを見ていた。ガンダムでも勝てなかった機械獣軍団を、マジンガーZが簡単に撃退したことに驚いていた。

沙慈「ここまで化け物じみたMSがあるなんて・・・。」

ルイス「すごい・・・手が飛び出てる・・・。」

沙慈「光子力研究所、興味があるな。ルイス、僕は光子力研究所に行く。謎のエネルギー光子力に今日 を持った。」

ルイス「ちょっと沙慈、学校はどうするのよ！」

沙慈「何だっていい、光子力を勉強するチャンスだ！！」

沙慈は光子力研究所に行くことを決意した。しかし彼もまだ知らなかった。自分の内なる力に。

続く

## 第四話 Zの評価（後書き）

次回「光子カビーム」



## 第五話 光子力ビーム

光子力研究所

教授室にミツル、弓親子、レンがいる。教授室のモニターにテロリスト達の映像が映る。もうすぐ彼らは町につくようだ。

弓「ミツル君、わかっていると思うが町の海にテロリストがここに来つつある。」

ミツル「わかっています。」

レン「でも可笑しいな、なんでよりもよって光子力研究所ばかり狙うんだろ？」

かおり「レン君の言う通りよ。でもねレン君、今日本でテロ活動を行っているテロリストによって光子力研究所は拠点としても十分だし、光子力エネルギーを悪用されたら世界を簡単に掌握できるの。それにテロリストは今少なくとも高性能のMSと互角に戦える機械獣を購入しているらしいわ。ここを占拠できる可能性も高くなった。最も機械獣を製作している人物はわからないけど。」

ミツル「よく知ってるな。」

かおり「私は昔から情報収集が得意だから。」

ミツル（ますますこの女があやしくなってきたな。）

弓「CBは今ユニオンと交戦中だ。だからミッル君、できるだけ時間を稼いでくれ。マジンガーの新装備の開発までに。」

ミッル「マジンガーの新装備？」

弓「そう、その名も『ジェットスクランダー』。」

ミッル「ジェットスクランダー・・・」

弓はジェットスクランダーの完成図の紙をミッルに渡した。スクランダーの形状はいかにも大空を飛ぶ赤い翼だった。

弓「君のマジンガーZは確かに最強のスーパーロボット、だがマジンガーZは飛行能力がない。よってそれを補うために造られた飛行マシンだ。当然超合金Zを使用している。」

ミッル「しかし、よく短期間で製造できましたね。」

弓「マジンガーZの力だよ。自己再生と自己修復を備えて予定以上に早くできそうだった。」

レン「弓教授、敵の勢力はどれくらいなの？」

弓「そうか、まだ話していなかったな。飛行専用MS150機、陸戦MS100機、タロス神像100機だ。機械獣は1体位いると予測できる。」

かおり「350機、ガンダムですらかなうかどうか・・・」

ミッル「わかりました弓教授。」

弓「しかし無理はするな、危なかったら、すぐ引き上げても構わない。」

ミッル「はい、マジンガーズ、そしてミッル・兜、出撃します。」

ミッルは教授室を走って出た。

町

テロリスト「これより町を制圧する。」

テロリストの下っ端「ヒヤッハー！町は消毒だー！！！」

MSの出すマシンガンやバズーカが発射されて町は轟音とともに破壊し尽くされてしまう。しかし住民のほとんどはちゃんとテロリスト襲撃に気づき、日本の軍部に保護されている。

テロリストの下っ端「どうやら民衆のほとんどは避難しているようです。」

テロリストのリーダー「まあいい、次は光子力研究所・・・『そうはさせるかテロリスト共！！』何だ！」

ドカドカとMSの数倍のスピードでMSの大軍の中心にマジンガーズは走った。

テロリストの下っ端「リーダー、あれはマジンガーズです！空にそびえる正義のスーパーロボットとわれています。」

テロリストのリーダー「構う事はない！こっちには300の大軍、

そして敵はたかが一機、数で押せばどうということはない！！」

そうテロリストのリーダーの言う通りである。300:1では誰もがこっちが勝ったも同然というだろう。

しかしそれは敵が『リアルロボット』だったならばの話である。

テロリストの下っ端×30『ヒッター！マジンガーZは消毒だー！！』

テロリストの下っ端の駆る陸戦MSはマシンガンやらバズーカを发射させた。しかしマジンガーZはそれらをよくよけている。

ミッル「いくぞテロリスト共、ブレストファイヤーー！！」

マジンガーZの胸部に15万度の巨大な高熱光線が瞬時に発射される。当然テロリストの下っ端のMS30機は溶解された。

テロリスト達は恐怖のあまりMSを動かせなくなっている。

テロリストのリーダー「ひるむな！所詮は一機だ！数で押せ！！押しまくれ！！」

テロリストのリーダーは作戦もなしに味方を指示する。

テロリスト「とにかくなるべく長距離に持ち込め！」

空戦MSのビームライフルの数百の銃撃がマジンガーZに襲いかかったが、マジンガーZには何の支障もない。それどころか、ビーム

ライフルの銃撃の3割は確実によけていた。

ミッル「ルストハリケーン!!」

マジンガーZの口のスリットから酸の入った強風が出される。空戦MSの8割は強風に巻き込まれ、装甲などを抜かされ空気中の一部となってしまうた。

テロリストのリーダー「かかったな。」

とテロリストのリーダーは誇らしげに笑った。

テロリストのリーダー「タロス神像、地面から出てこい、マジンガーZを抑えつけろ!!」

ミッルは下の道路を見てみるとタロス神像が素早く地面から出てきて、マジンガーZを抑えつけた。

ミッル「くそ、放せ、放せよお!!」

タロス神像100機の抑えつけによりマジンガーZはびくともしない。

タロス神像は容赦なく攻撃し、ホバーパイルダーのガラスを容赦なくヒビを割らせる。

ミッル「くそつ、ここまでかよ!!マジンガーアアア!!」

ミッルは死を覚悟した。今マジンガーZは身動きは取れず、さらにタロス神像の鉄拳が今間近に近づいている。もう絶体絶命だ。

そんな時だった。

- -

- - - M A Z I N   P O W E R   発動 - -

光が輝いた。マジンガーZが金色の光を輝かせてマジンガーZを押さえつけているタロス神像を発光だけで粉々にしていった。その光はまさに神の放つ威光だった。

テロリストのリーダー「な・・・何が起こった？」

マジンガーZは半径1kmの地帯を地面だけにした。よく見ているとマジンガーZの頭部のホバーパイルダーの超強化ガラスが元に戻っている。

- - - っつたく見てらんねえよ - - -

ミツルは突然声を聞いた。マジンガーZがしゃべった？いやそんなはずはありえない。いくらマジンガーZといえどもロボットが自我を保ってしゃべらない訳がない。しかしミツルは声が聞こえた。その声の主はマジンガーZだった。

- - - おい、相棒、だまってりゃあ随分と調子に乗りすぎじゃねえの、ええおい、お前の操縦は武器に頼りすぎなんだよ、もうちつと拳を使え。あとビームライフルの弾幕をよけるようにしろよ。 - - -

ミツル「マジンガーZがしゃべってる・・・」

- - - 嫌しやべってるわけじゃないんだが・・・まあ前と特定の人物にしか聞こえないちよつとしたテレパシーみたいなもんだ。  
- - -

すげえ。とミツルは思った。超兵器を持ち合わせた力、そして心をもったロボット、歴史上そんな機体は存在するはずがなかった。

- - - ・ ・ ・ 俺がしゃべったからちよつと混乱しているのか、おつと相棒、敵さんの機械獣が目の前に居るぜ。 - - -

ミツル「あ、本当だ、いつのまに・・・」

テロリストが購入した機械獣ストロンガーT4が、マジンガーZの前に立ちふさがっていた。

テロリストのリーダー「行け、ストロンガーT4、マジンガーZを叩き潰せ！」

ストロンガーT4「グオオオオ！！」

ストロンガーT4は腹の巨大な腹車を回転させ、ルストハリケーンに匹敵する強風を起こす。

ミツル「ならばこちらも、ルストハリケーン！！」

勝負は一瞬でついた。マジンガーZが今までのマジンガーZのルストハリケーンの段違いのルストハリケーンを出しストロンガーT4を0.1秒で消滅させた。

テロリストのリーダー「な・・・なんだその力は！？」





テロリストのリーダー「あと2分だ、もう何もかもおしまいだ!!」

ミッル「くそっ!どうすればいい!?プレストファイヤーならばなんとか・・・」

・・・相棒、光子カビームを使え!!・・・

ミッル「光子カビーム?」

・・・まず真ん中のダイヤルを右に回せ!・・・

ミッル「よし、まわした。」

・・・次は狙いを定める!・・・

ミッル「目標、グロイザーX10!」

・・・メーターを見る、どんどんたまっていくだろう?・・・

ミッル「黄色、オレンジ、濃いオレンジ、赤・・・」

・・・よし撃てえ!!・・・

ミッル「うおおおおおおお!!!」

全てを無に帰す神の閃光、

その名も!

その名も!

その名も！

ミッル「光子力っビイイイイイイイイイイイイイイイム！  
！！！！！」

マジンガーZの目から巨大な金色のビーム砲が発射された。それは  
淀んだ雲を切断しグロイザーX10に直撃する。

ミッル「フルパワーだああああああ！！！」

マジンガーZはさらに威力を上げ、グロイザーX10をはるか上空  
へ持ち上げる。そしてそれは地球圏外に入り、宇宙のなかで爆発し  
た。

ミッル「おじいちゃん、マジンガーは本当に無敵なんだね。」

こうして町の戦闘は終わった。マジンガーZの強さはまた世界をと  
どろかすことになる。

続く

## 第五話 光子カビーム（後書き）

次回「BEAST」

感想などがあつたら書いてください。

## BEAST編開始

### 第六話 BEAST（前書き）

作者「〇〇の本編を無視してオリジナルテロリストを造り文才もなしに武防備で小説を書く私の姿はお笑いだったぜ。

マジンガーズの敵はもはや一人もおらん、地球上のテロリストを葬り去り、英雄になってしまえ。」

## BEAST編開始

### 第六話 BEAST

マジンガーZ

それは西暦2307年に突如現れた謎のスーパーロボット。

マジンガーZ

それは神にも悪魔にもなれる力

マジンガーZ

それは光子力エネルギーの塊

A E U

アナウンス「続いてのニュースです。日本の静岡県熱海市でまたテロリストが襲撃を実行しましたが、謎のMS、マジンガーZによって撃退されました。映像を流します。」

テレビ画面の映像にマジンガーZがテロリスト相手に猛威をふるっている姿が映し出された。鉄壁の超合金Zのほかにルストハリケーン、プレストファイヤー、光子力ビーム、マジンパワー、どれも前代未聞の武器が民衆や軍人にそれらを目に焼きつかせる。

それを見たパトリック・コーラサワは

コーラさん「すげえ……あれならガンダムでも敵じゃあねえ。あ

の時の雪辱を晴らせるかもしれない。」

A E U 隊員「しかしコーラ隊長、確かに恐ろしいパワーですが飛行能力がありません。」

コーラさん「わかってねえなお前、確かにマジンガーZは飛行能力がない。だが光子力研究所は密かにマジンガーZ専用の飛行武器を造ってるって噂だ。」

A E U 隊員「本当でありますか！？だとしたらマジンガーZは・・・

コーラさん「ああ、あの機体はどんどん強くなる。三大国家の全てのMSの数の戦闘能力に匹敵するちからをな。一度でもいいからマジンガーZを動かせたいぜ。」

パトリック・コーラサワーはマジンガーZに憧れを抱くようになってしまった。A E Uの軍人たちはあのプライドの高いコーラサワーを魅了させるマジンガーZにすごさを感じたのである。

## 光子力研究所

ミッル「『神か悪魔か、驚異のマジンガーZ』、『人類の超兵器！？』すげえ・・・マジンガーZがこんなにも有名になるなんて・・・

ミッルは今日の朝新聞を読んでいた。昨日のテロリスト襲撃からマジンガーZの勇猛さは世界にとどろいていた。パイロットのミッルは奮えが止まらなかった。世界中で有名になったからうれしいわけではない。ミッルの祖父、長十郎・兜が造り上げたマジンガーZが

ガンダム以上の評価を得、おじいちゃんの有能さが世界に注目されたからである。

弓「だがうぬぼれてはいけない。これからテロリストは紛争を続けるだろう。そして機械獣も強さを位ましてマジンガーZに挑んでくる。油断はするな、平和を守れ。マジンガーZは世界の平和のために造られたもの。ジェットスクランダーも完成したことだ。ミツル君、ジェットスクランダーのテストをしてみよう。」

ミツル「お、漸く来ましたね。よし、いっちょやってみます!!」

光子力研究所外にはでかいプールと言っている水場がある。その下にマジンガーZを収納してある今そのプールの水が真つ二つに裂き、マジンガーZが姿を現す。ただ違うのはマジンガーZの背中にジェットスクランダーが合体してあるところである。

ミツル「パイルダアアオオオオン!!」

ミツルはマジンガーZにトッキングし、マジンガーZの目が光る。そして・・・

ミツル「スクランダアアウイング!!」

その叫びとともにマジンガーZは上空を飛んだ。飛行能力も重ね備えたマジンガーZは敵はいないかのようなさっぱりした顔で飛んでいた。

ミツル「はええ、こいつは速い!!少し体が痛い、別に大したこ

とはねえ、行くぜ！東京までひとつ飛び・・・」

しかしマジンガーZのモニターから弓教授の顔が浮かんできた。

弓「待つんだミツル君、マジンガーZが東京に出てしまったらいろんな意味で大惨事になりかねない。だが熱海までは許容しよう。あそこなら民衆はマジンガーZをよく知っているからな。」

ミツル「わかりました、熱海までですね。行くぜエー！マジンゴー  
！！」

マッハ9のスピードのマジンガーZは熱海を駆け抜けていった。

弓「全く・・・やんちゃな所は兜博士によく似ている。「続いての  
ニュースです。」ん？」

突然テレビのアナウンスからニュースが入った。

アナウンス「今朝午前二時にユニオン、AEU、人革連の管轄基地  
1つずつが謎のテロリスト「BEAST」によって制圧されました。」

弓「何？」

アナウンス「BEASTは民間人や戦争で降伏した人間をも虐殺し、  
自分たちは破壊を楽しむ獣たちだ、と「BEAST」の被害者の一  
人がそう証言していました。」

弓「BEAST、か。マジンガーZがいようといなかるうといずれ  
できてしまう組織だった。ミツル君にもBEASTの討伐に専念せ  
ざるをえないな。」



???

そこは元ユニオンの管轄基地、しかし今は謎のテロリスト「BEAST」の本拠地の一つ、

???「よく来た諸君。」

諸君とは世界中で紛争を続けていたテロリスト達であった。

グロトネリア「私の名前はグロトネリア、このBEASTのリーダーだ。」

グロトネリアはテロリストたちに自己紹介した。グロトネリア、スペイン語で暴食。

グロトネリア「我々はユニオン、AEU、人革連を潰し、新たな政治をたてる。悔しくないのか？ユニオンなどに虐げられ接種された故郷出身の人間たちよ、憎くないのか？勝てそうな戦争を「CB」にめちゃくちやにされて・・・だから我々テロリストは一つになった！みよ、この機械獣とMS軍団を。」

グロトネリアの後ろには数万のMSと数百の大型機械獣がずらりと並んであった。

グロトネリア「これだけの兵力なら数年でAEUあたりを潰すことも不可能ではない。さあ、賽は投げられた！！今こそ戦え、BEAST（獣たちよ！！）」

世界中のテロリスト達「うおおおおおおおおおおお!!」

かくして世界中のテロリスト達はBEASTとして活動をするようになる。

続く

## BEAST編開始

## 第六話

## BEAST（後書き）

七話「ミッル・兜VSBEAST」

BEAST編が終了したら別のガンダムOOの二次創作とコラボしようかなと思っていて愚かな私でございます。

## 第七話 ミッル・兜VSBEAST前哨戦

E沙慈・クロスロードは熱海市に漸くついた。光子力の研究のために光子力研究所を訪れようとしたが友人ルイスに何度も止められた。しかし、深夜の夜、なんとか掻い潜って東京駅につき、今に至ったというわけである。

沙慈「ここが熱海か・・・海が綺麗だな。」

沙慈は光子力研究所にいく前として、熱海を観光しに行っている。

沙慈が店に入ると奇妙な土産を見かける。

「マジンガー饅頭」

マジンガーZの顔の饅頭が置いてあった。

沙慈「数日にしてマジンガーZの人氣が上がるなんてな、英雄として扱われている。ガンダムみたいに戦争を根絶する力があるのか・・・。」

沙慈はマジンガー饅頭を一セット購入し、店を出る。

そして、沙慈は上空から、マジンガーZが飛んでいるのを見かけた。

沙慈「マジンガーZ！生で見たけどやっぱり浪漫を感じるな・・・。」

マジンガーZはジェットスクランダーで飛行していた。熱海の町をひとつ飛びしていた。当然民衆の目に入っており「マジンガーZだ。」「すげえ空飛んでる」などと驚愕の声があがる。

BEASTの前衛隊は光子力研究所の襲撃を依頼された。

なんでもBEASTのリーダー、グロトネリアに光子力研究所のマジンガーZの力量をデータに収めろという話である。

えちよwwマジンガーZとガチでやるってないわーwwwと思っ  
てはいけない。BEASTの行動隊長とその部下達は数年前に開発  
されたボロ戦艦に乗っていた。その戦艦はカモフラージュで他の住  
人には見えないようになってる。

BEAST行動隊長「兎に角ボロ戦艦で出撃してる俺たちはマジ  
ンガーZに勝てる確率はない。なので機械獣を使用しデータを獲  
る。機械獣トロスD7とゴーストファイヤーV9で。」

ぼろ戦艦の格納庫に巨大な角を備えた四本脚型機械獣トロスD7と  
両腕に鎖と鉄球に、頭部に炎を備えた機械獣ゴーストファイヤー  
V9の姿があった。

ミッル・兜とマジンガーZは熱海を飛翔した後、通信が入ったので  
光子力研究所に戻った。何でも敵が熱海市に潜入したらしい。あ  
のぼろ戦艦はたとえ相手が見えなくても敵機に察知できるようにな  
っているのだ。

そのぼろ戦艦は、ついに光子力研究所までたどりついてしまった。

BEAST行動隊長「よし、機械獣を投下しろ！」

ぼろ戦艦は空からトロスD7とゴーストファイヤーV9を投下する。  
ミッル・兜「機械獣2体か。タロス神像で相手を消耗させないのか？」

言うや否やトロスD7はマジンガーZに向けて突進してきた。

ミッル「突進してきた！？ブレストファイヤー！」

マジンガーZは胸板でブレストファイヤーを発射する。しかしトロスD7には全く効かなかった。

ミッル「何！？」

トロスD7はマジンガーZをZにそのまま激突し、頭の角でマジンガーZの腹の超合金Zを貫いた。

ミッル「な、超合金Zが！？」

トロスD7の角には超合金Zをも貫く破壊力がある。そしてその角は光子カビーム以外のマジンガーZの武器を無効にするバリアみたいなものを備わっている。

ミッル「くそっ！こんなのマジンガーZのパワーで・・・」

ミッルはマジンガーZでトロスD7の角を折ろうとしたが、ゴーストファイヤーV9の鎖でマジンガーZは縛られてしまう。

・・・何やってんだ相棒！マジンパワーを機動しろ！・・・

ミッル「わかつてる！マシンパワー機動！」

MAZIN POWER 機動

いざマシンパワーを機動すると、トロスD7は消滅し、ゴーストファイヤーV9の鎖をも消滅させる。

BEAST行動隊長「さすがはマシンガンズか・・・だが少なからずデータを集めた。ゴーストファイヤーV9、後は任せたぞ。」

BEASTの行動隊長達がのぼる戦艦は撤退していく。

ミッル「何だっただんどうか？まあいいか、ルストハリケーン！」  
マシンガンズはルストハリケーンを出し、ゴーストファイヤーV9を倒す。

目の前の敵はいなくなった。

BEAST基地 本部

BEAST行動隊長「ただ今帰還いたしました。」

グロトネリア「よし、報告を聞こう。」

BEAST行動隊長は部屋にあるモニターでマシンガンズの戦闘データを解析する。

グロトネリア「ちょwwwうわwwwトロスD7で穴開けてもマシンパワーで即回復とかないわwww。」

BEAST行動隊長「では全戦力を光子力研究所に回しますか？エ

ネルギー切れになったら一機にたたくというのは？」

グロトネリア「わーってるよ、今回は様子見だけどさ、次からは光子力研究所を本格的に襲う、だがその前に……」

BEAST行動隊長「その前に……何でしょうか？」

グロトネリア「全軍出撃だ。目指すはAEU本部だ。」

続く



第七話 ミッル・兜VSBEAST前哨戦（後書き）

次回「超合金Zを渡せ!？」

超合金Zを渡せ！？（前書き）

グラハムさんが出てきます。

## 超合金Zを渡せ！？

ミッル・兜はボスを連れて光子力研究所に向かっていた。ミッルは悪友であるボスだけは自分がマジンガーZのパイロットであることをばらした。ボスはミッルの正体を知った時、驚愕と疑問に包まれていた。

ボスは「兜お、本当にお前はマジンガーZのパイロットなのか？」と聞くとミッルは「何なら行くか？光子力研究所に。」と士官学校の授業が終わった後ボスを光子力研究所に連れて行ったのだ。

そして今に至る。

静岡県熱海市の山の森林に光子力研究所は立っていた。ボスとミッルは100m先からそれを直視している。

ボス「ひええええ、これほど規模がでつかいとはなあ・・・」

ミッル「光子力研究所は最重要機密だからな。テロリスト以外は手を出さないようになっている。」

ボス「兜お、そういえば光子力って謎のエネルギーだけど一体その実態は何なんだ？」

ミッル「光子力は富士山の地下からとれるジャパニウム鉱石からでるエネルギーだ。昨日弓教授の解析で分かった。」

ボス「富士山からとれるねえ・・・だったらAEUやユニオンに利用されちまうんじゃないか？」

ユニオンやAEUは世界三大国家のひとつである。だがその独裁政治が世界を牛耳り、CBやBEASTみたいなテロリストを造って

しまった。光子力研究所もC Bの協力者であるが武力介入はせず、ただC Bに資金を送っているだけにすぎない。むしろ世界平和のために超合金Zと光子力の研究をしているのだ。

ただ戦争にいかず誰からも恨まれず、光子力研究所は日々を送ってきたのだ。

ミッル「確かにボスの言う通りいつの日かA E Uやユニオンに利用される可能性は高い。だがそんなことはさせねえさ。俺とマジンガ―Zがいる限り！」

コツコツコツと、道路から足音が聞こえる。

???「成程、すごい正義感を持っているな。マジンガ―Zの操縦者君。」

ボス「ゆ・・・ユニオンの軍人じゃねえか!？」

???「よく知っているではないか太つちよの少年。そう、私はれつきとしたユニオンの軍人である。」

ミッル「俺はミッル・兜と言います。あの・・・貴方は?」

グラハム「あえて言おう、私はグラハム・エーカーであると。」

光子力研究所 教授室

弓「成程・・・ユニオンの上層部はそんなことを言っていたのか。しかしいくらなんでも軽すぎやしないかね?」

弓教授は白人男性と黒人男性のユニオンの軍人、ハワード・メイス

ンとダリル・ダッジと交渉？をしていた。

ハワード「確かに光子力研究所は表向きには世界平和のために光子力を研究しております。しかしながらGN以上のエネルギーを放つ光子力は戦争の火種になる恐れがあります。」

ダリル「もちろん教授が例のものをお渡しすれば我々は何の危害も加えることもなく光子力の研究をご自由に続行できます。」

弓「マジンガーZの超合金Zが目当てだったとはな、てつきり私はマジンガーZや光子力と置いていたのだが・・・だが私の一存では決められない、この研究所の最終決定権はマジンガーZのミッル・兜君にゆだねられている。超合金Zの譲渡は彼の許可を得てからだ。」

光子力研究所 入口

ミッル「超合金Zを渡せ!？」

グラハム「そう、それ以外にはなにもいらない。」

ボス「でもそれってマジンガーZを寄越せといってるようなもんじやねえのか!？」

ミッル「いや、マジンガーZの超合金Zをデータにかなりの量の超合金Zを生産している。おそらくグラハム中尉、あなたはこれをして・・・」

グラハム「いや、我々も1時間前にそれを見た。安心したまえ。別にマジンガーZを奪うわけではない。数量の超合金Zをあげるだけ

でいい。そのためにはミッル・兜君、君の一存が必要だ。頼む。」

ミッル「わかりました。超合金Zをお渡しします。でもひとつ理由をお聞かせください。」

グラハム「何だね？」

ミッル「超合金Zをどう使うつもりなんですか？」

グラハム「これは極秘事項なのだが・・・仕方がない君たちに特別に教えてあげよう。私の搭乗機であるフラッグを強化するための。そしてガンダムに勝つ！それだけだ。」

ミッル「・・・そうですか・・・」

グラハム「しかし超合金Zの護送はテロリストの大いなる餌でもある。そうしたら戦争の火種になりかねない。そしてミッル君、君にはユニオンまで超合金Zを護送してもらいたい。勿論タダとはいわない。光子力研究所にはかなりの資金を投入しよう。」

ミッル「わかりました。護送は任せてください!!」

グラハム「それは頼もしいな！ミッル・兜君！」

ボス「おっと、待ちな。兜、お前だけはいいいカッコはさせねえぜ。グラハムさんよ、俺も連れてってくれねえか？」

ミッル「ボス!？」

グラハム「しかし君は一般人だ。軍人として君に危害を加えるわけ

には・・・」

ボス「大丈夫だよグラハムさんよ、この俺は士官学校でも結構鍛えてんだ、体力の自信はあるぜ。」

グラハム「・・・わかった。君の願いを聞こう。」

1時間後光子力研究所 地下室

ミッル、グラハム、ハワード、ダリル、ボス、そしてユニオン兵十数人は超合金Zの黒い山を見上げていた。世界最強の装甲を作り上げる超合金Zはおよそ200tに及んでいた。

ハワード「何という・・・」

ダリル「すごいな・・・」

グラハム「さて、これ程の超合金Zの量を鉄箱に詰めて護送するのが大変だな。」

ミッル「問題ありませんですよグラハム中尉。マジンガーのパワーなら数分で終わります。」

グラハム「わかっている、そろそろ護送空船が来るころだ。皆、準備をしていけ。」

ミッル・ハワード・ダリル・ボス・ユニオン兵「はい！！！！（おう！！！！）」

かくして超合金Zをユニオンまで死守するためミッフルは奇妙なMSと戦うことになるのである。

続く



超合金Zを渡せ！？（後書き）

次回「マジンガーZVSCB（ちょっとしたタイトル詐欺）」

マジンガーズVSCB（ちょっとしたタイトル詐欺）（前書き）

決してCBとは戦いません。

## マジンガーZ V S C B (ちょっとしたタイトル詐欺)

### マジンガーSIDE

ミッル・兜がユニオンの軍隊と同行し、超合金Zを運送している。その知らせはCBのメンバーにも知らされていた。

ウェーダの中でも危険度レベル7以上に該当する超合金Zと光子力CBのガンダムマイスター達は協力関係だから光子力研究所を無視してきた。しかし流石に世界平和の為光子力を研究しているとはいえ、敵の勢力に超合金Zという最硬の武器を運搬していると言うことは、CBにとっても我慢極まりないことだった。別に光子力研究所が裏切ったわけでもない。CBの最高幹部イオリアの計画にとっても衝動が起こる超合金Zの運送を止めるため、CBのメンバーは動き出す。

### 太平洋

ユニオンの戦艦ミッル・兜はユニオンの戦艦の左方にマジンガーZを操縦している。グラハム・エーカーも戦艦の右方にフラッグで操縦している。何故ならCBはともかく、BEASTみたいなテロリスト相手では大軍を呼んでこの戦艦を奪うつもりなのでその護衛をしている。

ミッル「こちらマジンガーZ、左方には今のところ何も起きていません、エーカー中尉、応答を。」

グラハム「こちらエーカー、こちら何も害はなし、本艦、応答を。」

ダリル「こちら本艦。・・・前方30kmから高エネルギー反応！

ビームライフルです！」

ミツル「まずい！」

ミツルはすぐさまマジンガーZの機動力で戦艦の前方に向かい、30kmも離れているMSの撃ったスナイパーライフルを受け止める。そのおかげで戦艦は無傷。マジンガーZにそれなりの損傷は与えたが、戦闘は余裕で続行可能のダメージだった。

ユニオン「あれほどの高威力のライフルを正面で受け止め、あまつさえ大したダメージも受けていないとは。」

ハワード「マジンガーZは本当にこの時代に存在する機体なのか！？」

マジンガーZの堅牢さを見て驚いている。無理もない。マジンガーZの活躍は今のところ静岡県熱海市にしかない。だから世界では映像しかわかっていない。だからユニオンの軍人の彼らにとってマジンガーZの活躍を見るのは初めてだろう。

ミツル「まずい！敵がきた！前方約30kmあたりか、マジンガー、解析を頼む！」

マジンガーZは前方30kmの映像をパイルダーにいるのミツルに見せる。

ミツル「な！？あれて！！！」

そう、まぎれもなくあの機体だった。緑の装甲を覆うガンダム、ガンダムキュリオスの姿だった。

ガンダムSIDE

ロックオン「なんつー堅牢さだよったく。」

ガンダムマイスターのロックオン・ストライスは自分の射撃が通用していなかったことに少し驚愕していた。

そこへブトレマイオスの艦長 スメラギ・李・ノリエガから通信がかかる。

スメラギ「ロックオン、射撃はもう結構よ。別の任務が入ったわ。今東北10kmから超合金Zの運送を情報入手したBEASTの軍隊が今そっちに向かっているわ。」

ロックオンは少し苦虫を噛み、

ロックオン「了解。ロックオンストライス、BEASTを狙い撃つ！」

刹那・F・セイエイ、ティエリア・アーデ、アレルヤはBEASTの機械獣軍団と交戦している。BEASTの機械獣軍団とは今まで2、3回交戦しており、マジンガーズが初めて機械獣を倒した時に不意をつかれ撃墜されそうになったが、少し改良を重ねてガンダム達の連携攻撃により機械獣を追討することは容易になり、総計6体ほどの機械獣を撃破した。しかし今回は水中戦なので、苦戦は必須。そして機械獣は水中戦を得意とするグロッカスX10であり、ブレストファイヤーに匹敵する超高熱ビームでガンダムを追い詰めている。

アレルヤ「まずいね。エネルギーがもう少ない。任務は失敗かな？」

ティエリア「何を言っている、アレルヤ・ハプティズム。ガンダムマイスターに敗北は許されない。」

刹那「確かにあの機械獣は水中戦を得意とし、尚且つ間合いも通じない非常に厄介な敵だ。だがあの熱光線ビームはGNフィールドで防御できる。つまり……。」

アレルヤ「困役が必要となるわけだね。」

ティエリア「その役目は僕がしよう。ヴァーチェの装甲ならばあの機械獣のビームにたえられる確率は充分ある。」

アレルヤ「よし、頼むよティエリア。」

刹那「エクシア、目標を駆逐する。」

作戦は決行した。

まずヴァーチェでキングタンX2に真正面から向かい、熱光線ビームを受けるもののGNフィールドで防御し、キングタンX2に抱きつく。グロッカスX10は頭部にある鎌でヴァーチェから抜け出すとするもののヴァーチェは動じない。

そのすきにエクシアがGNソードでグロッカスX10を何本も突き刺し、グロッカスX10は機能を停止し、爆発する。ヴァーチェはエクシアがグロッカスX10にGNソードを刺している最中に手を離し、離脱した。

アレルヤエ……。

刹那「任務完了した。これより……。」

アレルヤ「待て！敵機がこちらに向かつてる！？あれは……戦艦なのか！？」

アレルヤが視認した戦艦の名は海底要塞サルード。その名の通り水中戦用戦艦である。

サルードの司令部

エレガ「さすがはCBのガンダム、グロツカスX10を倒すとは、だが……少し油断したな。グロツカスは1体だけだと思っなよ！！！」

サルードの頭部から大量のグロツカスX10が出現した。その数30。

3VS30これは絶望的な差だった。

アレルヤ「二人とも！撤退しよう！」

エレガ「やらせるところか？」

エレガは機械獣を操る杖でグロツカスX10を指示し、グロツカスX10はガンダム達を囲んだ。

いかに機動性の高いガンダム達でも、水中ではキングタンX10の

機動力にはるかに劣っていた。

エレガ「さあ行け！キングタンXキングタンX10よ！ガンダム達を血祭りにあげろ！」

キングタンX10達の熱光線ビームがガンダム達を襲う。だがそこに救世主が現れた！。

ミツル「ブレストファイヤー！」

後方からキングタンX10の2体がブレストファイヤーによって溶解される。

キングタン達も「何があった！？」と思い攻撃を中止する。

救世主は鉄の城、マジンガーZであった。

ティエリア「あれは！？」

刹那「マジンガーZ、来てくれたか。」

マジンガーはすぐさまその機動力でエクシア達の救助に向かう。

そしてマジンガーZはエクシア達を腕で掴み水中から脱出しようとする。

エレガ「逃がすなキングタン達よ！魚雷でマジンガーZの動きを止めろ！」



キングタン達は腹にある魚雷でマジンガーZの動きを止めようとしたが、ガンダム達がGNフィールドを展開して、損傷は最小限に抑えられた。

エレガ大佐「くそっ逃がしたか！」

マジンガーZは水中から空中へと向かっていく。

続く

マジンガールZVSCB（ちょっとしたタイトル詐欺）（後書き）

次回・・・の前にちょっとしたプロト作品を近日公開しようと思います。

プロト作品

予告

IS インフィニット・ストライス

魔神皇帝（前

今回はちょっととした次回作宣伝みたいなものです。

IS「インフィニット・ストライス」。それは女性にしか起動出来ない最強の兵器。その兵器で女性が男性よりもかなり活躍してしまい、気が付くと女尊男卑の時代になってしまった。しかし例外にその兵器を起動できる男性が二人。

一人は織斑 おりむら 一夏 いちか、第1回IS世界大会総合優勝および格闘部門優勝者である織斑 千冬の弟である。

そしてもう一人は 兜 ミツル、光子力エネルギーに選ばれし者であり、この世とは思えない最強のIS 『魔神皇帝』の操縦者である。

『魔神皇帝』の誕生の謎、それはISの開発者である篠ノ之束 しののたはねと光子力という怪物じみたエネルギーを開発した兜 長十郎、この二人の人物の協力から始まった。兜家、織斑家、篠ノ之家は昔からかなり仲が良かった間柄にあった。ミツルと一夏は小学校からの友人でありよく遊んだ仲であった。

長十郎は光子力エネルギーをいずれISに詰め込もうと画策していた。長十郎は束と相談し束はそれに快く承諾した。

設計とエネルギーの提供は長十郎、ISの部品などは篠ノ之束に任された。

『魔神皇帝』

ISのコアは光子力エネルギーと束が造りだしたISのコアを融合

することで完成した。

次はISの装甲だが、兜長十郎が製作したどんな手段を使っても破壊不能である超合金ニユーZa<sup>ゼットアルファ</sup>で備わっている。

ISのシールドバリヤーは光子力フィールドという光子力を使用したシールドバリヤーを備えている。

絶対防御の機能もある。

IS武器は拳と胸の熱板、肩の剣である。もちろん他の武器もあるが、光子力エネルギーを使用して生産される武器が多い。

では武器を紹介しよう。

### 光子力ビーム

『魔神皇帝』のビーム兵器。光子力フィールドを展開しその先から瞬時に放たれる放たれるビーム、50%のパワーを放つても町を一瞬で破壊しかねない一撃必殺のビーム。

### ギガントミサイル

『魔神皇帝』の必殺ミサイル。光子力フィールドを展開し、光の粒がミサイルとなることのできるミサイル兵器。威力はTNT火薬1200トン。

### ターボスマッシュヤーパーンチ

『魔神皇帝』の腕の側面にある螺旋状の刃を回転させて発射する口ケツトパンチ。ISのシールドエネルギーでも防ぐことはできないのは言うまでもない。

カイザートリガー

『魔神皇帝』の肩から抜かれる二丁拳銃。正確無比かつ必殺の銃撃を敵に見舞う。弾を撃ち尽くしたらグリップ下部に付いている刃を使って手斧として用いる事が出来る。

カイザーブレード

『魔神皇帝』の肩から抜かれる剣。その切れ味は簡単に重装甲のISを切り裂く程。

ファイアーブラスター

『魔神皇帝』の胸板から放たれる一五〇〇〇〇〇度の高熱光線。ISでも一瞬で溶解する。

他にも武器がさまざまあるが武器の説明はこれくらいにしておく。

そして最後に操縦者だ。当然ISには女性しか起動できないので二人は知り合いの織斑 千冬に『魔神皇帝』のテストパイロットを頼んだ。

織斑 千冬は承諾し、早速ISを起動しようとした。

しかしそこでアクシデントが起こる。

なんとISなのに、起動できない。起動できないのだ。

製作者の二人は『まさか失敗した!?!』と思っただろう。しかしアクシデントはそれだけじゃない。

数時間後、『魔神皇帝』を地下にしまった後、機体のテストをこっそり見ていた兜 長十郎の孫、兜ミツルはそつと『魔神皇帝』に

さわってしまい、・・・起動させたのだ。

これを見ていた長十郎、束、千冬は驚愕した。女性にしか起動できないISが織斑　一夏を除き初めて起動させてしまったのだ。

まだ中学生のミツルにはまだ自分のやった重荷が理解できていなかった。

そして、兜ミツルは高校生になる。運命のイタズラだった。

友人と織斑　一夏と一緒に女性だらけのIS学園に入学する。

こうして兜ミツルは織斑　一夏と同じく世界で数少ないISを起動できる男として人から尊敬され、誘拐の対象とされるようになる！

ミツル「ターボスマッシュアアアアアアアアンチ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9592s/>

---

機動戦士ガンダム00 魔神Z

2011年8月8日15時10分発行